

—資料8—

カルチャーショック

時の流れ—若者への期待—

AKIYAMA SHUZO
秋山 修三

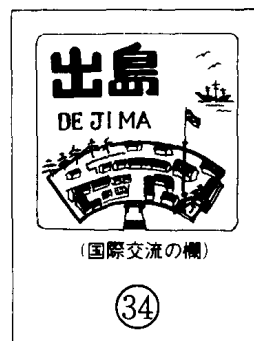
初めての海外留学からもう30年も経つ。大阪大(理)に在職中カナダの州立アルバータ大学化学教室へ博士研究員として2年間研究に励んだ。Hooz 教授の研究室は総勢8人。カナダ人は2人だけという極めて国際的なものであった。現在の日本の理系博士課程の現状と酷似している。当時本邦は国力を付けつつある時期であったが、研究環境は欧米がより恵まれていたので海外留学の意義は十分にあった。行きはドルショックに、帰りはオイルショックにもろにぶつかった1ドル350円時代である。香港や台湾から留学生が激増し社会問題化の兆しを見せていた。日本人には欠けるたくましい彼らの行動力には圧倒された。時代は変わり昔のように高度な研究環境を求めて留学する意味は薄れた。高度成長に伴って研究設備面での充実が他国より断然よくなったからである。

憧れのヨーロッパへは9年前に文部省短期在外研究員として初めて訪問した。彼の地の文明に接した時の感動は今でも鮮やかによみがえる。「木と多湿」の国から「石と乾燥」の国へ来たカルチャーショックがいかに大きかったことか。その後何度か渡欧する度に積み重ねられた文化遺産の喪失にますます圧倒されるばかりである。ごく最近ドイツのケルン大学に Vogel 教授を訪問する機会があり、つぶさに大学を見せて頂き現状を伺った。参考になる部分が多いので触れてみる。大学への進学につながるギムナジウムへの進学率が約30%と高くなり、大学進学者は160万人を越し、女子学生の占める割合も40%まで上昇した。19世紀始めフルボルトが構想した理想の大学像(権力からの自由、教育と研究の一致、そして教育者と受教育者との立場の体等化による学問の発展等)は第2次戦後色あせて大衆化してしまい、日本に似て職業訓練の場という性格を持つに至ったようである。異なる点は殆ど総てが国公立で入学試験も授業料もないこと。しかし卒業資格試験は厳しい。実験系では収容能力に限りがあるので進級するには厳しい筆記試験が課せられる。再度の不合格は大学からの追放となる。従って教える側の責任も重い。これからの日本の大学の理想像と考える時、大いに参考にすべきであろう。

研究最先端を維持して行くためには、独創的アイデ

アの発想と一刻も早い実行による実績作りが要求される。まさに人がかかわる。後継者養成に大学が果たす役割は重い。カルチャーの創生は若者にゆだねられているのだから。

(薬学部教授)



私の日本人論 (第6回)

君は友達そしてライバル

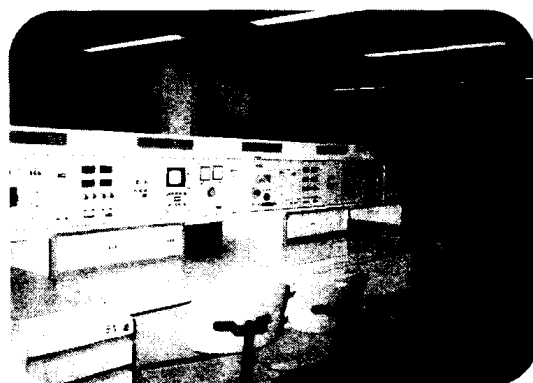
FUKUNAGA HIROTOSHI
福永 博俊

海外を訪れたり留学したりする機会は、一昔前に比べれば飛躍的に増してきた。私自身が大学院生の頃(十数年前)には、海外での学会に参加するにはかなりの決心が必要だったが、最近では大学院生でも気軽に(少し語弊があるかもしれないが)海外での学会に参加している。また、海外旅行や留学のためのガイドブックが増え、少なくとも欧米諸国の地理や習慣などに関しては、豊富に情報が手にはいるようになった。しかし、真の意味でその国を知るのはなかなか難しい。言い古されたことではあるが、日本は島国であり、我々の社会は必ずしも世界標準ではないことを知ることの重要性を、最近頃に感じている。

一例として、日本と米国における学生気質の違いについて、印象に残っていることを書かせて頂く。私は、海外の大学を訪れた際には、機会があれば学生実験を見学させてもらっている。実験器具が整備されているのに関心させられることが多いが、それに加えて、米国で学生にした質問の答えに驚いた。「日本では、学生たちが相談して報告書を書いたり、他の学生の報告書を真似たりすることもある。ここではそんなことはないのか?」との質問に対して、答えは「私たちは報告書で評価されてる。どうして自分で努力して書いた

報告書を他の学生に写させたりするのか?」であった。この意見が全ての学生の意見を代表しているわけではないかもしれないが、日本の大学生に同様な質問をしても、上記のような解答は返って来ないであろう。私は米国滞在中に、「米国社会では、“fairに競争する”と言うことがごく普通に受け入れられている。競争の少ない日本の大学では、教師の側も学生の側も共に甘やかされている。」との印象を受けていた。私の質問に対する学生の答えは、学生間でも競争原理が表だって機能していることを感じさせるものであった。

海外での学会に参加した学生たちに感想を聞くと、「もっと英語を勉強する必要があることがよくわかった。」との答えが返ってくることが多い。英語の必要性を身を持って感じてくれたことは非常に有意義なことではあるが、他の参加者とのコミュニケーションが十分には行えなかったということでもあろう。もう5



ウィーン工科大学の学生実験設備

年も経れば、その国の社会生活や大学生活や根ざした感想が聞けるのではないかと楽しみにしている。

(工学部教授)

